

# 光円寺報

2011年 7月

〒679-2323 兵庫県

神崎郡市川町甘地384

後藤明照・由美子（惟蓮）

Tel&fax 0790-26-0162

mail [Kouenji\\_dayo@nifty.com](mailto:Kouenji_dayo@nifty.com)

http://Kouenji-hou.com/

通信費年間 1000円

いわれのない犠牲を

他者に押し付けずにすむような社会を

作り出すためにこそ、

私の生命は使いたい

小出裕章



仏教徒宣言（その九十一）

今年、梅雨入りが例年よりも早いぶん早かったため、ジメジメとした鬱々とした日が続くのかと思っていたら、先日、もう梅雨が明けたと言う事がニュースで流れていました。そして、その中で梅雨の期間は、今までの平均日数とほぼ変わらないので、季節が早く終わったんだ。というような話でした。この国には春・夏・秋・冬と言った四季があつたはずなのに、「暑い」と「寒い」だけになって行くのでしょうか。そんな極端な気温の変化に私の身体が悲鳴を上げています。そして、もう夏本番。すでに各地では三十五℃を超える猛暑日を記録しているようです。

そんな夏日が続く中、福島第一原発内では、今もなお収束作業に当たつておられる沢山の下請け・孫請けの作業員の方々や東電の社員の方が居られます。そして彼らは、あの映像によく映っている白い放射線防護服や突き出たマスク・ゴーグル・手袋を着用するというフル装備です。しかも「ピット・ピット」という放射線測定器の警告音を気にし、暑さに耐えながら毎日作業を続けて居られるのです。しかし、その収束に向けての作業は、当初の工程表通りに行かずに書き直され、前途多難な不安要素の多い「ヒバク」覚悟の作業になっています。その作業されている人たちの年間被曝線量の基準を、緊急時の応急対策という理由で、五〇ミリシーベルトから一〇〇へ、そして二五〇ミリシーベルトへ、そして上限撤廃へと国はどんどんどんどん、引き上げてしまいました。この低線量の被曝は、外からの放射性物質による被曝と外部被曝と、放射性物質を吸い込んだり、放射線に汚染された食べ物や体内に摂取する事によって被曝する内部被曝の両方が在ります。が、炎天下のもと、放射線量の高い過酷な環境下での作業は外・内の被曝に対する精神的なストレスや、肉体的な疲労は、私たちに測り知れないものがあるでしょう。

そして、この年間の被曝線量・基準の引き上げによる「ヒバク」という問題は、ホットスポットと言われる地域や、それ以外の放射線の

高い地域で生活を強いられていた人たちにも共通の懸念される問題です。そして、内部被曝で言うと、全てのこの国に住むいのちが、危機に晒されている、「私の問題」でもあるのです。

そんな中、大震災・大事故、から四ヶ月が過ぎました。当初は、世界中の目が被災地に向けられました。今はどうでしょうか。被災地から遠く離れた所に住んでいる私たちは、被災者の人たちの事に思いを寄せたり、気に留めたり、眼差しを向けたりとする所か、どこか徐々にこの東日本大震災という現実を直視することを、避け始めてきてはいないでしょうか。それは何故かと言うと、この国で生活して行くには、これから何十年もの間放射能と付き合っている事ではない現実があります。それは、今、被災地で起こっている事です。同時に自分の中に起こっている事と繋がっていて、自分の中に在る放射線被爆に対する不安や、生を脅かされている漠然とした恐怖から逃れる方法として、そのことを考えない・その事実を見ないように無意識の内に行っているのです。そんな不安や恐怖が引き合って出て来ているのが「経済が疲弊しないように立て直すには、電気を安定供給する原発の早期運転を望む」という声で、この一連の流れは、計画停電・節電要請を促す経済界から聞こえてきます。これまでのような生活水準を維持しようと思えば、不安定な電力供給は避けなければならず、このままでは貧乏な生活になってしまう。このような不安を煽る事に対して、振り回され揺らいで、迎合してしまう自分が在りませんか。このような声に呑み込まれてしまうのは、実は私の中にもこの声が宿っているからです。というのも、三・一一以前にしっかりと自分の中に在った、便利で綺麗で明るく楽しい生活を求めて止まなかった私そのものがこの声の主だったのです。それが、三・一一を機に方向転換を迫られたのでしよう。この迫られた方向というのは、一体どの方向から、どの方向への転換だったのでしょうか。多くの人の死から生へ。日常から非日常へ。私たちは、三・一一という門をくぐったのです。この事実において起ち帰るべき処ははつきりしています。

南無阿弥陀仏

釈明照

## 『放射能汚染の現実を超えて』（河出書房新社）から

### 小出裕章さんの言葉

原子力に反対して活動している人たちの大きな根拠の一つに「いのちが大事」ということがある。

しかし、「いのちが大事」ということだけなら、原子力を推進している人たちにしても否定しないだろう。

決定的に大切なことは、「自分のいのちが大事」であると思うときには、「他者のいのちも大事」であることを心に刻んでおくことである。

「自らが撒いた種で自らが滅びるのであれば、単に自業自得のことに過ぎない。

問題は、自らに責任のある毒を、その毒に責任のない人々に押し付けながら自分の生命を守ったとしても、そのような生命は生きるに値するかどうかということである。

私が原子力に反対しているのは、事故で自分が被害を受けることが恐いからではない。

原子力とは、徹底的に他者への搾取と抑圧の上に成り立つものである。

その姿に私は反省しているのである。世界がかかえる問題に向き合っていて、いわれのない犠牲を他者に押し付けずにすむような社会を作り出すためにこそ、私の生命は使いたい。

そして、そのような社会が作り出せたその時に、原子力は必然的に廃絶されるのである。